歴史資料館だより

発行者　聖隷歴史資料館
〒四三三－八五五八
浜松市三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学二号館二階
TEL　〇五三（四三九）三四〇七
FAX　〇五三（四三九）三三四七

はじめに愛があった

元聖隷福祉事業団常務理事／
元聖隷厚生園園長　鈴木　唯男

聖隷歴史資料館の開館により、長谷川保氏の信仰の生涯を通しての、神の奇しき御業の数々が、ビデオ、写真、書物等によって示されている。

歴史資料館の正面を飾る『ペテロの足を洗うキリスト』の描かれた迫力のある絵と、長谷川保氏の赤ペンで綿密に書き込まれた聖書が見学者を立ち止まらせている。

一九二六年復活節に創業された聖隷社クリーニング店の始めに、アイロン台の余り板で造った金庫代わりの木の箱に「一九二六年復活節創業、神のものは神に返せ　聖隷社」と書いた。長谷川保氏は「これからこの箱に入るものは神のものだから、神のために用いるものであり、聖隷の続く限りこのことは絶対に守らなければならない」と言い続けていた。

私が聖隷社に入って間もない頃、事業に失敗した人が相談に来た時、話した後でその人の前で、「神のものは神に返せ」と書いてある金箱をひっくり返して「どうぞお持ちなさい」と惜しみなく、無条件で与えたのです。私には全く驚いたことであったが、長谷川保氏の信仰生活からは「なすべきことをなしたるのみ」であったのでしょう。

聖隷社の生活は、朝の礼拝から始まる生活で、隣人に仕える業への展開が、長谷川保氏の信仰生活から生まれていた。

山形氏が軍隊から帰られ、クリーニングの仕事を山形氏に任せた長谷川保氏は、鳥居氏等と共に、消費組合同胞社の仕事をしていた。その組合事務所に結核を病む故に身の置き所がないと、病む青年と父親が長谷川保氏を訪ねてきた。

長谷川保氏等は、結核を病む青年と病む故に身の置き所のない困窮の状況とを受け容れ、この青年と共に生きることから、聖隷の仕事、ベテルホームが生まれた。

当時の結核を病む者とその家族は大変困難な状況に置かれていた。長谷川保氏は結核患者救済には、家族全体を対象に考え、家庭によっては、家族全員を迎え、重荷を分かち合い、苦難の途を共に歩みました。

聖隷事業団機関誌『聖隷』第一〇七号に、聖隷の後半世紀の取り組む課題は、第一には「はじめに愛があった」という聖隷の創立の心たる基本理念をいかに継承していくかにあると書かれている。

聖隷のはじめに愛があった。聖隷の心は愛であると示しているのでしょう。

神の愛は、私たちが神に反抗していた時も私たちを愛し続ける愛であった。だから私たちを神と和解させ、私たちを生かし導いてくださるのは、神の全くの一方的な愛であると示し讃美している。その真実の姿がキリストの十字架と復活によって、神の完全な愛が示された。聖隷のはじめに「神の愛」があった。聖隷の歩みは、神の愛に守られ導かれて、日毎の営みは先ず「礼拝」からと、これからも変わることのない神の愛に守られて。

◆聖隷歴史資料館のご案内◆

開館時間は一〇時～一七時です。展示をごゆっくりご覧いただけるよう一六時三〇分までにご入館ください。

休館日は、土・日、祝祭日及び聖隷学園の休業期間とさせていただいておりますが、聖隷集団の各法人・施設の職員、入居者の皆さんは、時間外や休館日であっても入館できます。時間外や休館日に入館を希望される方は、予めお問い合わせください。

聖隷歴史資料館では、現在、「十字の園」特別展を開催しております。十字の園で引き継がれている理念、創業から今日までの歩み、貢献された人物の紹介、現在の施設の状況をパネルや映像、展示品を通してご紹介しています。館内の特別展コーナーとあわせて、併設の会議室にも展示がございます。本年四月末まで開催予定です。この機会に、是非一度、ご来館ください。お待ちしています。

我らのともがら一人も欠くることなく

隠退教師・元遠州栄光教会牧師　宮崎　洋

M・ブーバーの著作に、『我と汝』というのがある。「汝」は神又は隣人を意味するであろうが、彼はなぜ「汝と我」と題しなかったのであろうか。自分があって他者があるのではなく、認識に於いても存在に於いても「汝」があって、この我が存在する。この「汝」が神を意味する場合、神が自らを「我」として示し、人を「汝」と呼びかけることによって、われわれの存在は確立されていく。隣り人と我との関係に先立って、神と我、神と隣り人との関係が先行しているのである。

旧約レビ記一九・一八の意は「あなたはあなたの隣人に対して、あなたと同じような者として」である。隣人と我又あなたとの関係以前に神がかかわっておられる。これは「小さいものの一人」の背後に、主が偕に在し、一つとなっておられることを示す。これは全て人を含む。全ての人に働き給う。「我は主である」は千鈞の重みをもつ。汝と我との間に活ける神の働きが存在し、これが根源である。この語はどうしたわけか、新約に欠けている。

二年程前、敬老の日に浜北愛光園に招かれた。応接室にキリストが弟子の足を洗われたマークの置物があり You shall love your neighbour as yourself が記されていた。ハッと胸を突かれたのは単なる命令形ではない。正しい訳であるかどうか確信できないが、日本語訳では味わえない深みと奥行きをもった訳文である。注目したいのは You will love ではなく You shall love と訳されている点である。これは語り手即ち神御自身の意志と働きが強く含意されている。そして新約に欠けている「私は主である」がこの You shall のなかに含意されていると読みとれたのである。即ち神御自身が愛する力も道も与えてくださるというのである。

日本語訳も長谷川さんの色紙も「自分のように」とある。この訳語は曲者である。原文は「あなた自身」である。「自分」に対応する言葉はない。あなたでも彼でもない。これは戦前の軍隊用語であった。旧陸軍では、僕、私、あなた、君などは禁ぜられていた。相手に対して階位をつけて呼んだ。おそらくこの「自分」に対応するものがあったとすれば、天皇であろう。

筆者は戦地で二回の戦傷と赤痢、帰国して結核と癌を患った。既に死んでいる人間である。他に手術台に乗ったのも両三度ではない。今老いてみるかげもないが、この老いの身にどれだけ多くの方々の労苦と心づかい、そして莫大な費用がかかっているか計りしれない。これらに応えられる歩みも働きもして来なかった。この働き人の方々の頂点に立たれたと言おうか、むしろ一番下積みになって支えて下さったのが長谷川保氏である。「隣人を自分のように愛しなさい」は特愛のみことばであろうが、どの様な解き明かしも、長谷川さんの御生涯に及ばない。昭和二十三年初夏入院させて頂いた頃、朝食前の三十分間の礼拝で「我らのともがら一人も欠くることなく、この朝を迎え」の祈りが必ずあった。この祈りのない時「ああ、どなたか昨夜召されたのだなあ」と察した。長谷川さんがこの聖句を理解し解き明かされた以上に、活けるキリストが長谷川さんと偕に在し働きかけて下さったのである。このみことばは二十一世紀にも我々と共に我々を通して働くのである。

歴史資料館の四つの聖句（その三）

マタイによる福音第二五章三四～四〇節

『…お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ…。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。…』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

「道徳的その日暮らし」という言い方がある。「その日暮らし」とはもちろん経済的に余裕のない生活をいう。「宵越しの金」を持とうにも持てない生活のことである。これに「道徳的」という形容詞がつくと、「精神的」に余裕のない生活をすることになる。これはもともと輪廻転生の教えのもとで、徳行がより良い来世をもたらし、悪徳がより悪い来世をもたらすとの理解から、徳と悪徳の足し算引き算をしながら生きている状態を指して用いられた。悪徳を帳消しにするだけの徳を行わなければならないという観念に縛られて毎日を生きているのが「道徳的その日暮らし」である。

マタイによる福音書二五章のたとえ話によれば、「最も小さい者」を助けた人は、自分が助けたことを自覚していなかったし、助けなかった人も、自分が助けなかったことを自覚していない。↖

運営ボランティアをご紹介します

聖隷歴史資料館では、現在、ボランティアのご助力を得て収蔵資料の整理を進めています。館内展示以外にも、収蔵庫内の収蔵品は文書類、書籍、物品、映像資料、写真などを合わせると約二五〇〇点にのぼります。又、今後は館内説明への対応も課題となります。聖隷集団の職員研修や学園の学生・生徒、保護者、外部からの来館者への説明の機会は年間で約百回にのぼります。これまでに展示資料の説明シナリオを作成しておりますが、ボランティアの方々のご協力をいただいて、ご自身の経験やエピソードを交えた説明をいただけることを願っています。

現在活動いただいている三名をご紹介させていただきます。島田愃平さんは、『聖隷福祉事業団の源流』の著者、蝦名賢造氏との出会いから歴史資料の重要性をお気づきになり、以来、聖隷歴史資料館に積極的に関わってこられました。エデンの園に在住の尾関房子さんは、『歴史資料館だより』をご覧になり、歴史資料館に込められた熱意を感じられてボランティアに応募されました。出版社で百科事典の編集に携わっていらした経験を生かし、収蔵庫内の文書整理をお手伝い下さっています。小松洋さんは、聖隷の仕事に長く携われたご経験を生かして現在準備中の小羊学園特別展のために山浦俊治さんの記事や写真の抽出、館内展示中の聖隷関係法人のパンフレット整備に携わって下さっています。検査技師として長年聖隷病院に勤務された長谷川佳子さんもボランティアに登録をされています。

歴史資料館では半年ごとに特別展を実施して聖隷集団各法人の現在に至る歴史資料の整理収集を進め、各法人の理念、創業期の困難を支えた人物像を明らかにしていきます。その過程で、数多くの収蔵資料の整理や来館者への説明など、より多くの方々に運営ボランティアとしてご応募いただけるよう願っています。

運営ボランティアの方からひとこと

◎島田愃平さん

今私は、週に一回、資料の整理というか、資料へのコメントを書くお手伝いをしています。

油壺エデンの園長時代に、聖隷の歴史に強い関心を持たれた、蝦名賢造先生（独協大学名誉教授・柏木教会長老）に出会い、議論していますと、その裏づけになる資料はと、よく言われいつしか、聖隷初期の歴史にのめりこんでいきました。

先生の『聖隷福祉事業団の源流―浜松バンドの人々』が発刊されたこともあり、約十年の間に集まった、それらの資料や本等を新しい資料館で活用できたらと思い寄贈しました。

ただ私の覚えとしての整理で、人物ごとに、又恩賜金関係等の項目別に、資料や聞き書き、文献のコピー等を入れてファイルしただけであり、索引や、項目ごとに関連資料の存在や、資料の真偽性、などのコメントをつけておいたほうが、後々研究者が使いやすいのではと思い出かけるのですが、一向にはかどらないのが現状です。年のせいでしょうか。

◎尾関房子さん

八月初めのある日『歴史資料館だより』創刊号を目にしました。神へのひたすらなる祈りと激しく困難な仕事を働き続けた聖隷の歴史を後世に伝え、その基本精神であるキリスト教信仰を聖隷諸集団の中に確たる礎として根づかせたい、という熱烈な気迫を感じました。

私は学生時代マルクスに傾倒し社会に出て常に軋轢に苦しみ、長い放浪の後「弱きものよ」と呼び給う声に気づきました。すべてがお金で動くように見えていても決してそればかりではありません。年老いた私でもこの素晴らしいお仕事のお手伝いを少しでもできるならばと大喜びで応募いたしました。

資料館には愛の歴史を刻まれた方たちの息吹きが脈打ち、静かな中にも緊張感が漲っていて、ここへ伺うのは本当に心洗われる思いです。

↙助けた人は、自分の前に現れたのが「最も小さい者」でなくとも助けを必要としている人が目の前に現れたら、損得を考えずに助けてしまう人である。

「最も小さい者」を助けなかった人は、自分の前に現れたのが「大物」や「VIP」であれば助けていたのであろう。普通の人や小さい者が助けを必要としているのを見ても、いわんや「最も小さい者」が助けを必要としているのを見ても、自分が助けなければならないとは思わなかっただけである。「大物」ならば、何の助けを必要としていなくても、もみ手をして擦り寄って行く。この種の人は先ず自分の損得を考えるから、見返りが予想されなければ何もしない。見返り（より良い来世）を期待できないような「最も小さい者」が目の前で助けを求めていても見ることができない。

長谷川保はあるとき「乞食のような風体の老人」を見捨てることが出来ずに助けた。この老人は聖隷保養農園を一年中花の絶えない園とした。長谷川保は「乞食を救ったらキリストだったという西洋のおとぎ話のとおりだ」と思ったという（『夜もひるの…』、二一七頁以下）。長谷川保は経済的に余裕のある生活をしていたのではない。しかし「最も小さい者」への愛をゆたかに持っていた。彼は精神的に余裕のある生活をしていた。

（聖隷学園宗教主任　佐柳文男）

◆最近の動きと次年度に向けての取り組みについて

新歴史資料館が開設されてまもなく一年。半年ごとに企画実施する「特別展」を軸として二〇〇五年度までの三ヶ年計画を立案しました。特別展を通して各法人の設立の経緯、そのために尽くされた方々とその働きが改めて掘り起こされます。「常設展」は創業期から一九六六年まで終わっており、それ以降の歴史資料の収集と整理が課題でしたが、「特別展」が一巡すると結果的にその課題が解消されます。現在二〇〇三年四月からの小羊学園特別展に向けた準備が進んでおり、二〇〇三年一〇月以降は「牧の原やまばと学園」、「神戸聖隷福祉事業団」、「遠州栄光教会」、「聖隷福祉事業団」、「聖隷学園」の順に特別展を開催していきます。又、ボランティアの方々の力を借りながら収蔵している資料リストの整理照合が進められており、未公開の映像を再編集した二十数本のDVDも完成し貴重な映像資料をご覧いただけます。

次年度は、創業期から黎明期・激動期にかけての困難な時代を支えた方々の働きを掘り起こしブック資料の充実を図る他、在庫切れの聖隷関係書籍の増刷、二十五年ほど前にFEBC（日本キリスト教ラジオ放送局）で放送された『夜もひるのように輝く』をもとにした映音版の作成やホームページの作成、記録写真のデジタル化、運営体制の充実などを重点的な課題として取り組んでまいります。

◆刊行物のご案内

山内喜美子著
『日本で初めてホスピスを作った聖隷　長谷川保の生涯』

本書は一九九六年に文芸春秋から刊行されました。著者の山内喜美子さんはアナウンサーやサンデー毎日の記者として活躍された方でもあります。

本書はご自身の長期間にわたる熱心な取材と、詳細な資料の調査研究をもとに著されたもので、長谷川八重子夫人や家族、鈴木唯男氏、西村一之・ミサ夫妻、その他の関係者の証言や資料を手がかりに、聖隷創業期の困難と幾度にも及ぶ迫害を第三者の視点で捉え直されています。それまで断片的にしか語られてこなかった困難と迫害の中での家族のこと、聖隷の教育事業の黎明期に犠牲となった二女「澄さん」のことも記されており、読む者の心を揺さぶります。

また、一九六〇年代後半以降の急速な近代化と事業の多様化、事業規模の拡大の背景にあった長谷川保の強力なリーダーシップと先見性に光をあてるのみならず、現場で働いていた方たちの苦悩が記者ならではの正確な眼で捉えられています。

そして「神への誓いを果たすことに頑固なまでに忠実な八重子夫人の強い姿勢が、時に怯みそうになる長谷川を根底から支えていた。」と八重子夫人の存在の大きさを分析し、聖なる神様の奴隷として生きた長谷川保夫妻の生き方は、私たちに、何を最も大切にし、守っていかなければならないのか、というテーマのヒントを与えてくれるはずだと締めくくっておられます。

◆歴史資料館入館者の声（抜粋）◆

歴史資料館入口には、保氏の聖書が飾られていた。その聖書を見た時、またしても驚いた。それは、所狭しと聖書へ書込みがされていたからである。聖書を元とした神への信仰の深さを物語っていると思い、保氏の人間性がうかがえた。

また、入口には、「自分のように隣人を愛しなさい」と聖書の箇所から抜粋した言葉も飾られていた。聖隷の理念である「隣人愛」この言葉に心を打たれた。「隣人愛」という言葉を私は以前に、聞いたことがある。私は幼稚園児の頃から中学生まで、教会学校に通っていた。そこで「隣人愛」という言葉を耳にした。この言葉を初めて耳にした時、幼かった私は人を好きになることは、とても簡単なことだと思った。しかし、大人になるにつれて人間世界のみにとらわれない、この言葉の本当の意味が少しずつだが分るようになり、いかに実践するに困難な言葉だろうと思った。また、私は以前、聖隷三方原病院に勤めていたが、その時、創始者の長谷川保氏の話を総婦長さんの方から伺った。また、聖隷の理念と「隣人愛」の話を伺いこのような素晴らしい、歴史と理念をもった病院に勤務できることを誇りに感じた。まだまだ、自分の中では「隣人愛」は実践するに困難なことであるが、看護の仕事をしていく上、また、この先人間として問われていくことだと思う。以後、「隣人愛」この言葉を念頭において、生きていきたいと思った。

中に入った所に桑原青年の写真がある。保氏達は結核の病気をもった桑原青年と共に生きることを選択し、聖書にある「隣人愛」の言葉通りに実践した。自分が保氏と同じ立場に置かれたらどうしただろうと考えた。私はお世話することは絶対に出来ないと思った。自分の身が安定していないと他人のことを気にかける余裕を持てない。貧しい生活の中、でも共に生きようとした。保氏の生き方に凄いものを感じた。

（聖隷クリストファー大学看護短期大学部一年生）